

説明文の読解方略： 発話プロトコル分析による検証

2020746 稲垣恵美

1. 研究の背景と目的

日本人の読解力は低下してきている。経済協力開発機構（OECD）が 2003 年に行った PISE（OECD 生徒の学習到達度調査）において日本の順位は 8 位から 14 位に下落し、日本の読解力の点数の下落幅は各国中最大であった。読解力向上のための支援方法を確立することは必要なことである。しかし、支援の方法を確立するためには、まず読解の仕組みを明確にしなければならない。仕組みである読解過程における方略使用について検討することが必要であり、すでにさまざまな研究が行われている。

犬塚(2002)は、説明文読解方略の全体的な構造、すなわち統計的な相関関係に基づく相互の関連を明らかにし、指導に生かせるような下位尺度を提案した。この結果、方略使用傾向は「部分理解方略」「内容学習方略」「理解進化方略」の 3 つのカテゴリから成り立ち、またそれぞれ「部分理解方略」は「意味明瞭化」「コントロール」の 2 カテゴリ、「内容学習方略」は「要点把握」「記憶」「モニタリング」の 3 カテゴリ、「理解進化方略」は「構造注目」「既有知識活用」の 3 カテゴリからなりたつことが明らかになった。

発話プロトコル法をもちいた読解中の方略使用についての研究としては大河内(2002)がある。大河内(2002)は再読時における読解中の活動と表象の形成・修正の過程を文章の構造面に注目し明らかにしようとした。その結果、自己説明が少なかったタイプでは中心的命題を理解することができなかった。しかし、自己説明が多かったタイプも 2 種類に分かれ、自己説明が多く中心的概念正しく理解できたタイプは中心的概念に対して自己説明を行い、さまざまな方略を使用していた。一方、自己説明が多くても中心的概念が理解できなかったタイプは、自己説明が中心的概念に焦点を当てられていなかった。

本研究では、本研究では犬塚(2002)で示された読解方略が実際の読解でどのように使用されているかを、発話プロトコル法を用いて検証し、読みの

プロセスにおける方略使用の推移を明らかにする。また方略使用に文章タイプが影響をあたえるかどうかを調べるために、説明文的文章と文学的文章で実験を行う。

2. 方法

被験者

愛知教育大学の学生 10 名が実験に参加した。専攻は情報が 4 名、国語と国際文化が 2 名ずつ、社会と図工 1 名ずつである。

材料

文学的文章として小説「少年」(2050 字) (作：神西清) を、説明的文章として「紙になる科学者たち」(2338 字) (著：上岡義雄) を使用した。

手続き

実験は個別に行った。まず、材料文とは別の文章を用いて、実験者が発話プロトコル法を実際に行ってみせた。その際、考えていることをすべて話すように教示した。次に被験者がその文章を用いて十分だと思えるまで練習した。ただし、その際に被験者の発話が少ないと実験者が感じたら、再びプロトコル法を行ってみせた。または発話をうながす質問をした。

実験では、材料文読解後確認テストを行うことと読んでいる部分を鉛筆で追いつながら読むことを教示した上で材料文①をわたし納得するまで読んでもらった。発話はすべて録音し、材料文を鉛筆で追っている様子を記録するために実験者の手元も録画した。

本文読解が終わったあと、本文を回収したのちに確認テストを行った。

確認テストが終わったら、材料文②を使って同じように実験を行った。

材料文②の確認テストが終わったら、犬塚(2002)の読解方略質問紙を参考に作成した読解方略質問紙を実施した。その後、材料文①②の内容について以前から知識を持っていたかどうかのアンケートを行った。

表 1 説明的文章の方略使用数

		意味明瞭化	コントロール	要点把握	記憶	モニタリング	構造注目	既有知識活用
上位群	S8	25	28	91	40	38	3	5
	S4	11	4	0	4	6	0	1
	S9	3	13	1	6	10	0	0
	S2	23	17	79	24	19	0	0
	S5	6	8	0	4	4	0	3
下位群	S6	0	9	11	13	7	0	1
	S1	0	1	0	0	3	0	3
	S3	16	4	0	0	4	0	2
	S7	2	15	1	0	8	0	0
	S10	14	12	15	6	8	0	3

表 2 文学的文章の方略使用数

		意味明瞭化	コントロール	要点把握	記憶	モニタリング	構造注目	既有知識活用	心情状況把握
上位群	S8	12	31	61	29	11	3	0	34
	S7	1	13	0	1	7	0	0	1
	S10	1	7	8	3	3	0	3	7
	S1	0	1	0	0	1	0	3	9
	S2	14	15	54	16	8	0	0	0
下位群	S6	2	5	6	6	4	0	1	0
	S4	2	4	0	2	6	0	0	2
	S3	8	7	0	0	1	0	0	18
	S5	5	3	0	3	4	0	1	4
	S9	4	14	0	4	3	0	0	8

3. 結果と考察

犬塚の読解方略分類を参考にタグ付けを行った。しかし、犬塚の読解方略は説明文のための方略であるため、心情状況把握というタグを新たに用意した。心情状況把握とはテキストに明示的に表記されていない人物や背景に対する推論・推測の方略である。

3.1 読解プロセスの量的な分析

確認テストの選択問題の点数から、文章タイプごとに被験者を上位群、下位群に分けた。点数が同じ場合は記述問題の点数により順位を決定した。それをまとめたものが(表1)と(表2)である。

表から両文章タイプとも要点把握、記憶、モニタリングにおいて、差が現れた。説明的文章においては意味明瞭化においても差が表れた。文学的文章においてはコントロール、既有知識活用、心情状況把握においても差が見られた。

3.2 読解プロセスの質的な分析

上位群と下位群を比較した結果、文章タイプに関わらず点数の高かった被験者は、文章を読みすすめるながら推論、疑問の解決行動などを通じ、表象の修正行動を行っていた。説明的文章で下位の成績を納めた被験者は、大河内の研究のように、中心的命題に焦点をあわせることができていなかった。

反対に、文学的文章で下位の成績だった被験者は、人物や背景などに対する推論を読み進めていく中で正しい方向に修正することができなかった。

3.3 文章タイプによる方略使用の比較

文章タイプによる発話の違いを明らかにするために、カテゴリごとに1要因被験者内の分散分析を行った。その結果、意味明瞭化 ($F(1,9)=7.53, p<.05$) が文学的文章の平均より説明的文章の平均が有意に大きく、要点把握 ($F(1,9)=3.81, p<.10$) では有意な傾向が現れた。また、それぞれの文章タイプごとに、全員の方略使用数の総合計をそれぞれの文章の文字数で割り、その結果をつかって1要因被験者内で検定を行った。その結果、説明的文章のほうが方略を使用する確立が高いことがわかった ($F(1,9)=5.15, p<.05$)

4. おわりに

今回の実験では、中心的命題に焦点を合わせることができ、読み進めながら表象を修正することができる人が文章タイプに関わらず読解度が高いことが判明した。今後、中心的命題をはっきりとさせる方法が明確になれば、現在低下している読解能力を向上させるための支援策を作り出せるようになるであろう。